

「それが、お前達の答えか!!ならば私も相応の力でねじ伏せてやろう!!!」

デビモンの叫び声に併せて空気が振動し、揺れ始める。

オグドモンの内部がその震えで崩壊をはじめる。

デビモンが苦痛の声を上げながら丸まり背中蛹のよう割れる。

「デビモン!!ワープ進化!!」

粘液状の管が血管の様に交わり、より巨大な悪魔が現れる。

「ダンデビモン!!!!」





「あああああああああああああああ」

ダンデビモンの叫び声に併せて粘液状の巨大な両腕が背中から生える。
鞭の様にしならせデュナスモンに向かって行く。

「ふん!!!」

その両腕をデュナスモンが片腕で弾く。

「このデュナスモン、光達に仇なすものに容赦せぬぞ！」

掛け声と共に駆け出す。

しかし、駆け出した瞬間は見えど動く姿は見えなかった。

気付けば遠くにいるダンデビモンに接敵していた。

「速い…。」

連撃をダンデビモンに叩きこみ、反撃の両腕の攻撃を躱す。

ダンデビモンの攻撃により崩れた天上が光達にも落ちてくる。

「光！ヴォーボモン!!…ぐっ!?」

光達の危機を助けようとしたデュナスモンの隙を見過ごさず拳を叩き込む。

ダンデビモン自体に集中していれば、避ける攻撃も光達に意識が向き散漫になっている状態では捌き切れずにいた。



「光！ヴォーボモン！逃げろ!!!」

光も状況を理解し、ヴォーボモンを抱え逃げようとするが、落石の多さに躊躇せず潰されようとした時、輝きが放たれ岩石を吹き飛ばす。

吹き飛ばしたのはラヴォーボモンであった。

光を乗せ落石を躊躇し、壁伝いに疾走する。

「あんた…勇太はいないのに…。」

「究極体に進化してから、自分の力でも短時間なら進化できる！」

それより振り落とされないでよ！」

ラヴォーボモンは光の身体能力に合せて、勇太を乗せる時の半分以下のスピードで動いた。

それでも光には負担が大きく、顔に出さないようにしていたが、重心の不安定さがそれを物語っていた。

ラヴォーボモンは、その俊足で走る動体視力を発揮し、思考を止めない事により落石を予測し、可能な限り直線を維持しつつ進んでいく。

「なんで…助けてくれたの。」

勇太を乗せていた時は、動体視力、反射神経を活かしたアドリブの強い戦いを行っており、かつこの動きは、勇太共々ラヴォーボモン自体が不得手とする動きであり、負担も大きかった。

可能な限り集中したいこの場でも、光の問いかけにラヴォーボモンは応えた。

「なんで、そんな事聞くの？」

「だって…私は勇太を…。」

「勇太だけが、光とデビドラモンを助けたいと思ってたの？僕だって…光達が大事だよ。」

「…。」

「僕も勇太も…覚悟してきた。」

「でも…。」

「じゃあ…こう言わなきゃ分からぬ？」

会いたかったよお姉ちゃん。」

「…！」

「もう黙っててよ…照れると集中できない！」

ラヴォーボモンの発言は、一見意味不明ではあった。

しかし、その言葉は光と自分との関係性、そしてその関係性から想起される行動である事を光も理解しそれ以上の弱音を飲み込んだ。

「じゃあ、その分キビキビ動きなさい！」

この距離だとデュナスモンへデジソウルが届かない。

見てきて分かったけど私と勇太じゃ天と地程の総量差がある。

そのせいで、可能な限りパートナーに接近しないと…せめて 20m以内には近づかないよ。」

「がっつりダンデビモンの間合いに入ってるけど…分かった！振り落とされないでよ!!」

「分かってるわよ!!」



「ぬっ！」

その変化にはデュナスモンはすぐに気付いた。
ダンデビモンの攻撃を片腕で止め、その変化に遅れてダンデビモンも気付いた。
後方であるが至近距離に光達がいるのを気付き、デュナスモンから光達を攻撃するため手を伸ばす。

攻めるか、守るか、デュナスモンは、一瞬の思考で行ったのはまず恥じる事であった。
自身が光達を信じれず、戦いに集中出来ていなかった。

その一瞬の思考、それが終わってからのデュナスモンの行動は速かった。

ダンデビモンは、デュナスモンが守りに転じると予想していた。

この短時間の攻防ですら、集中力を散漫にさせダメージを貰う様子からであった。
例え攻めに転じようとも致命的な隙が作れると予想した。

しかし、デュナスモンは前進した。

今までの、光達になら恐らく通じた判断であった。

レディーデビモンに進化した際もどこか自身の判断はせず、光の判断に任せる節がある事をダンデビモンは前回の戦闘やこれまでの観察で分かったいたからだ。

光達はその類稀なティマーとデジモンとしての才能はあったが、心根の部分で弱さがあると。

この一瞬、ダンデビモンは読み合いの勝負になるとを考えていた。

そしてそれは粒さに観察した自分に利があると考えた…それはある意味間違いであった。
ダンデビモンがベットしたのは、今までの光達であった。

しかし、今ここにいるのは成長し、前に進んだ光達であった。

勝機はあった。

渡辺とムゲンドラモンとの戦闘時、光を主導したのはレディーデビモンであった。
その時の迷いのない行動を考慮すれば、また違った勝敗であったかもしれない。
それは…悔りであった。

「ドラゴンズロア!!!!!!!」

拳を叩き込むのと同時にデュナスモンの手にある宝玉からエネルギー波が発生し
ダンデビモンの腹部に叩き込む。



「がああああああああああああああああ!!!!!!」

一撃により、ダンデビモンは墜ちると思われたが、すぐさま態勢を取り直し、デュナスモンを巨大な両腕で掴みやたら滅多らに振り回し、遂にオグドモンを破壊し外部へと飛び出す。

「こいつ!?正気が…!!」

「っ!腹括るわよラヴォーボモン!私達も行くわよ!!」

「うん!」

外に出たデュナスモン達を追い、ラヴォーボモン達も外にでる。

「あれは…!」

「光ちゃん!」

天使型デジモンと交戦していた雪奈達も光達に気付き、そちらへ向かおうとする。

「!?」

「やっとか…。」

瞬間、雪奈達の身体がデータ状に分解されはじめる



「すみれちゃんこれ!?」

「強制転移!?マテリアルワールドになぜ!?しかもこのタイミングで!?」

トレイルモンに残っていたすみれ達の身体もデータに分解され転移されようとしていた。

周りを見渡すと、天使型デジモン達の街に幽閉されていた人間にはその兆候は見られなかった。

(シオンに招かれた人間は例外?それに、遠くに見える天使型デジモンと交戦音…転移は止まらない…なら今は!)

「す…すみ「落ち着いて皆さん聞いてください!トレイルモンを動かして、すぐにこの場から退避してください!絶対に止まらないで!止まつたらまた天使達に捕まります!!!」

デジモン達は人間を守って!!」

「ど…!」

瞬間、すみれとシンドゥーラモンは霧散し転移してしまう。

「…っ!仕方ない!トレイルモンを動かせ!」

「でも…あそこには、まだ!それにまた襲われたら!?」

「じゃあ、またあのクソみたいな街に戻るか!?今度は俺らがいるし守ってやる!だから行くぞ!」

「!クソ…!!」

デジモン達の呼び掛けに人間達はトレイルモンを動かす準備に入った。

「慎平!? 雪奈!!!」

突如の転移に、アンティラモン達は困惑したが、これが止まらない事、現実世界への帰還であり命に別状はない事を理解し切り替えダンデビモンへ向かう。

サンドリモン達もそれを理解し、ダンデビモンへ攻撃し両腕のデュナスモンを引き剥がす。

「進化したのだな！」

「そうだ!!」

「よし！」

必要最低限の言葉で状況を理解し合い、ダンデビモンに向き直り、攻撃をコンピネーションで捌いていく。

「完全に正気を失っているな！」

ダンデビモンはそもそもが不安定な状態であり、先のデュナスモンの一撃が引き金となり、完全に知性が消え獸の獰猛さで暴れ回っていた。

一撃、一撃からは思慮が消え雑ではあるが、自身のリミッターを壊した攻撃速度は先程までの比ではなかった。

「て…天使共!!!!!!!」

天使達に気付いたダンデビモンは空に浮かび上がり獸の雄叫びを上げる。

「なんと、おぞましい…。」

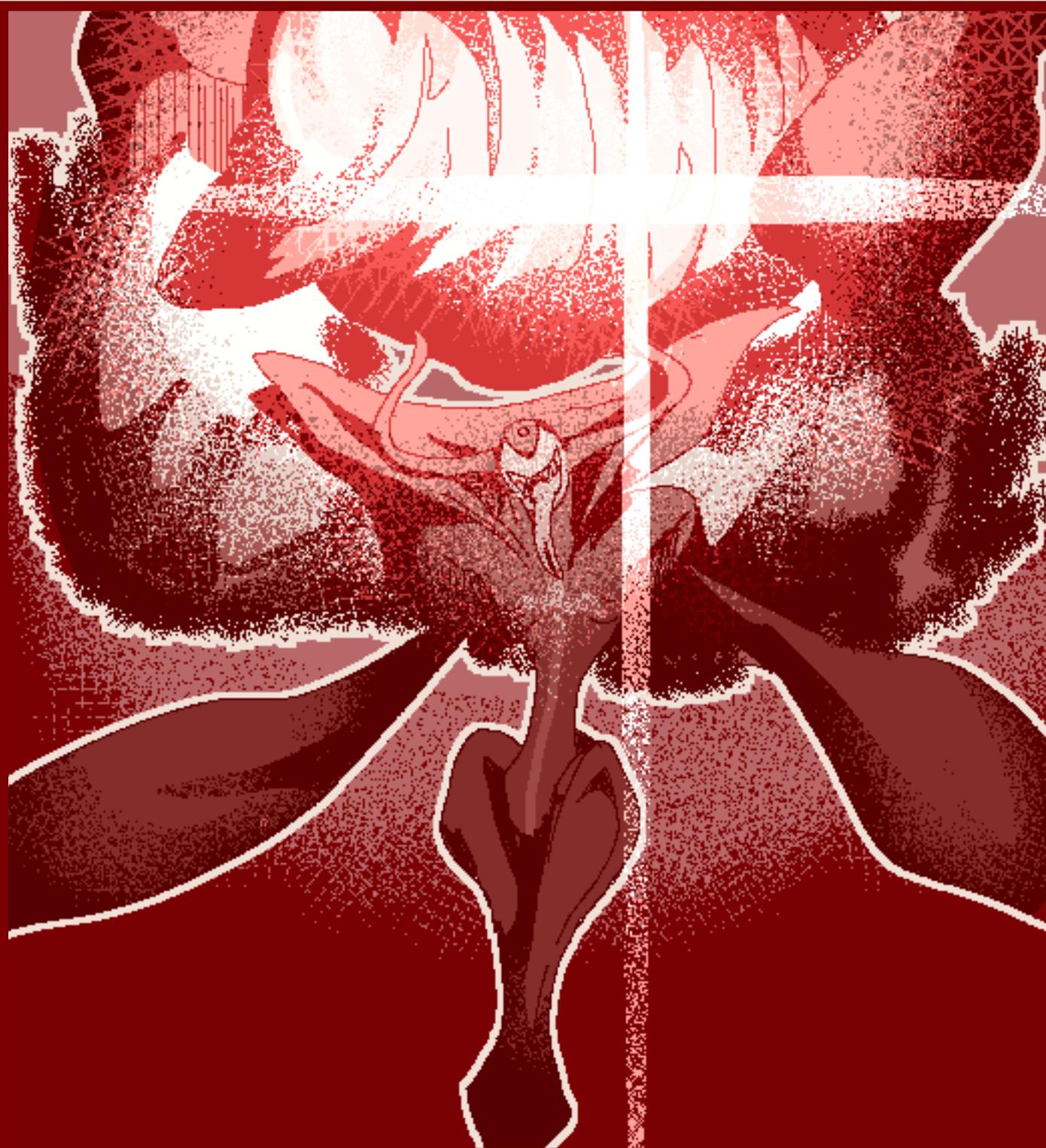
ひとりの天使型デジモンの呴きを契機に一気に悪魔を討伐せんと天使達が向かって行く。

ダンデビモンは口からエネルギー波を出し、それを両腕のからマイナスエネルギーを加えより巨大にしていく。

向かってくる天使達を見て、にたりと裂けた口で笑う。

笑うという行為は本来…。

瞬間エネルギー波が炸裂、自身を巻き込み一瞬にしてほぼ全ての天使を葬り去った。





その衝撃波が土煙の突風となり合流した光達を襲う。
合流した時点でラヴォーボモンは力を使い果たしヴォーボモンに退化していた。
光はヴォーボモンを庇うようにして土煙を受ける。

「死んだ!?」
「アレはそんなおタマじゃございませんわ！」
「チッ！」

空からダンデビモンが落ちてくるが雄叫びの様な笑い声をあげ再び起き上がる。
身体は傷つきながらも再び、エネルギー波を出すために飛翔した。
その視線は光達を明確に捉えている。

「…覚悟を決めるぞ。
デュナスモン、君が要だ。
我々では体力がもうない。」

「後ろのお馬鹿女がいれば話はお別ですけどね！」
ベルスターモンは天使もいなくなり、興味を失ったのか後ろで完全にだらけていた。

「…光、最期になるかもしれんから聞くが勇太は…。」
「…ごめん。」

光は目を伏せる。
その意識は特にサンドリモンに向いていた。

「…お顔を上げなさい鬼塚 光。
勇太様はお覚悟をして、それでもと迎えに行ったのです。
ならばあなたはお首をお下げるのではなく、そのお貧相なお胸をお張る事ですわ。」

「…分かっ…あ!?」

「おほほ、いつもお調子にお戻りましたわね。
それに、あなたはおぬるま湯のお夢からお厳しいお現実をそれでもとお選んだ。
…同じ殿方をお恋焦がれた同士、いえ、ひとりのお強者としてお敬意をお表しますわ。」

「…なによ、怒るに怒れないじゃない。」
「ふふ…さっお行きますわよ！」

「作戦はない！私達ふたりが全力でサポートする！
デュナスモン！思い切りブチかませ!!!」

「承知!!」



光がデュナスモンに触れ、ありったけのデジソウルを注ぎ込む。

反動で、貧血の様に膝を着く。

「ありったけよ。

行ってきなさい!!」

「…御意。」

デュナスモンがダンデビモンと同じ高度に飛翔し、拳を構える。

一息を吐き、そして最高速でダンデビモンへ向かって行く。

「ああああああああああああ!!!!!!」

ダンデビモンがデュナスモンを接近させまいと無数の腕を出現させ向かわせる。

「お“う”ら“あ”あ“あ”あ“あ”あ“あ”!!!!!!」

サンドリモン達がその腕を叩き叩き落していく。

「行けええええ!!!!!!」

「へあああ…。」

ダンデビモンはにたりと笑った。

一瞬だが、デュナスモンの拳が届く前にエネルギー波を出せると確信できたからだ。

デュナスモンをそれを感じ取ったが、今できる事を考え止まらず加速していく。



その瞬間、風が吹いた。

それは追い風となりデュナスモンの速度を限界以上に上げた。

「!?」

ダンデビモンは予想外の事態に完全に思考が止まり、完全に隙が出来た。

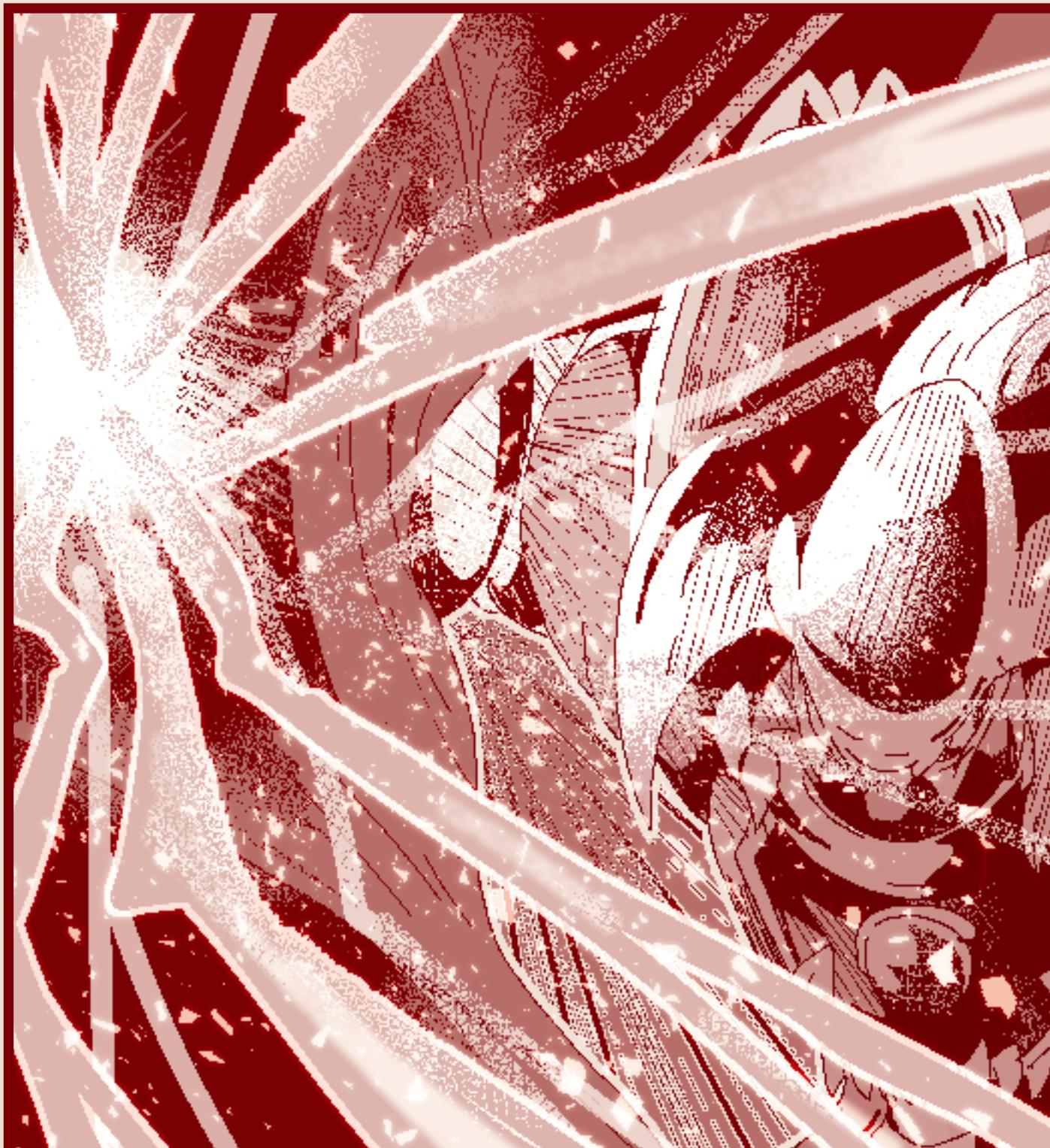
「勇太…。」

デュナスモンはこの風から勇太を感じ取った。

理由はない、心が勇太の姿を想起させた。

拳を強く握りしめ、その思いを籠める。

「ドラゴンズロアあああああああああ!!!!!!」
先程以上の渾身の一撃をダンデビモンに撃ち込んだ。
ダンデビモンの腹部が衝撃で大きく撓り、食い込んでいく。
エネルギー波が溢れかえり、正面からだけでなく後方に突き抜け発散していく。
「あああああああああああああああ!!!!!!」
重く、響き渡る雷鳴と共にダンデビモンを彼方へ吹き飛ばす。





常々自分を表す時に、私は抜け殻や器になると考えている。
その瞳は意志を持たず、口は物語を象徴を語らず、手は何も創造らない。
獣として産まれ、虐げられた時にも友のように反感を持つ訳でもなくただ従順に従った。

それが私の役割であったからだ。
墮天してもそれ自体になんの感情もなかった。
ただ、悪魔としての役割を果たした。
それが私に注がれた望みであったからだ。
あいつらに優しくしたのは、過酷なダークエリアの環境で仲間を減らさないためであり、それ以上の理由はなかった。
だから、あいつらが私を慕う事だけには感情が動いた…それは、困惑だった。
デーモン様に託された意志、仲間以外の天使、デジモンや人間を抹殺する。
荒唐無稽だし、気持ちは重々分かるし、恩義もある。
しかし、正直気が狂ってるとしか言いようがない。
それでも飲んだ、それが私に注がれた望みだからだ。
でもじゃあなんで…。
私が最後のひとりでなければ、逃げていたのだろうか。
いや…。

「死んだねえよな？」
「滅多な事言うんじゃないよ思いっきりフッ飛ばされてたけどドメになってないよ。」
デビモンが気付いた時には目の前にダークエリアから逃げてきたデーモンの部下達がいた。
「生きてるのか？私は？」



「なぜってそりゃあデュナスモンがとどめを刺さなかったからよ。」

「その子達が止めなければ私もとどめを刺していた。」

顔を上げるとそこには光達がいた。

「あんたは、デーモン様の命令無視して俺達に逃げろって言ったけどさ…やっぱあんたを見捨てて逃げれねえよ。」

「…。」

「あんた、強面の割に案外慕われてるじゃない。」

成長期のガキンチョ泣かせたらこのゴーグルくれた奴に顔向けできぬでしょ。」

「…状況は変わらない。」

貴様に戦意がなくとも私はお前達を殺すつもりだぞ？」

「いいわよ。」

その瞬間、殺すから。

あんた、勘違いしてるかもしれないけど私達は勇太の代わりになろうなんて1mmも思ってないわよ。」

ただ、あいつが残したものを持て私は私なりに生きてやるだけよ。」

「それに、もうそういった段ではないだろ。」

アンティラモン達がひょこりと顔を覗かせる。

「ケルビモン様…。」

「やめてくれ、様付けなんて。」

今さっき他の天使達からは兎臭いとなじられたばかりだ。」

「それでも…あなたは、私達にも優しかった。」

アンティラモンは溜息を吐き、指を示す。

その先には、崩壊しているオグドモンがあった。



「…そうか、もう全て終わったのだな。」

デビモンが力なく呟いた。

「終わったですって？何お寝言を言っておりますの？」

「サンドリモンか…。」

「あんた、なんで他の連中は逃がしたの？」

「デーモンには、全員で天使共と戦うよう言われたんでしょ？」

「それは…。」

デビモンの後ろで他のデジモン達がニヤニヤしてる。

「悪さすれば、その場で首飛ばしてやるけど、デーモンが死んだ今、手組むってんなら別に何もしないわよ。」

「どうせ、あの嫌われようじや、ずっと隠れながら暮らすなんてまっぴらごめんでしょう？」

「…しかし。」

「お本当に悪魔にあるまじきお義理堅さとお真面目さですわね。」

「お悪魔なら、誰かのお都合じゃなくて自分のお都合をお通しなさい!!」

「だからよお…おめえはどうしたいんだ？」

サンドリモンの肩に手を乗せながらベルスターモンがダルそうに顔を出す。

「…器にも望みが出来るのだな。」

ぽつりと呟いたデビモンの言葉は、サンドリモンがベルスターモンを張り倒す音にかき消され誰も聞いていなかった。

「…。」

「まっそういう事よ。

んっ…。」

光が手を差し出す。

「…？」

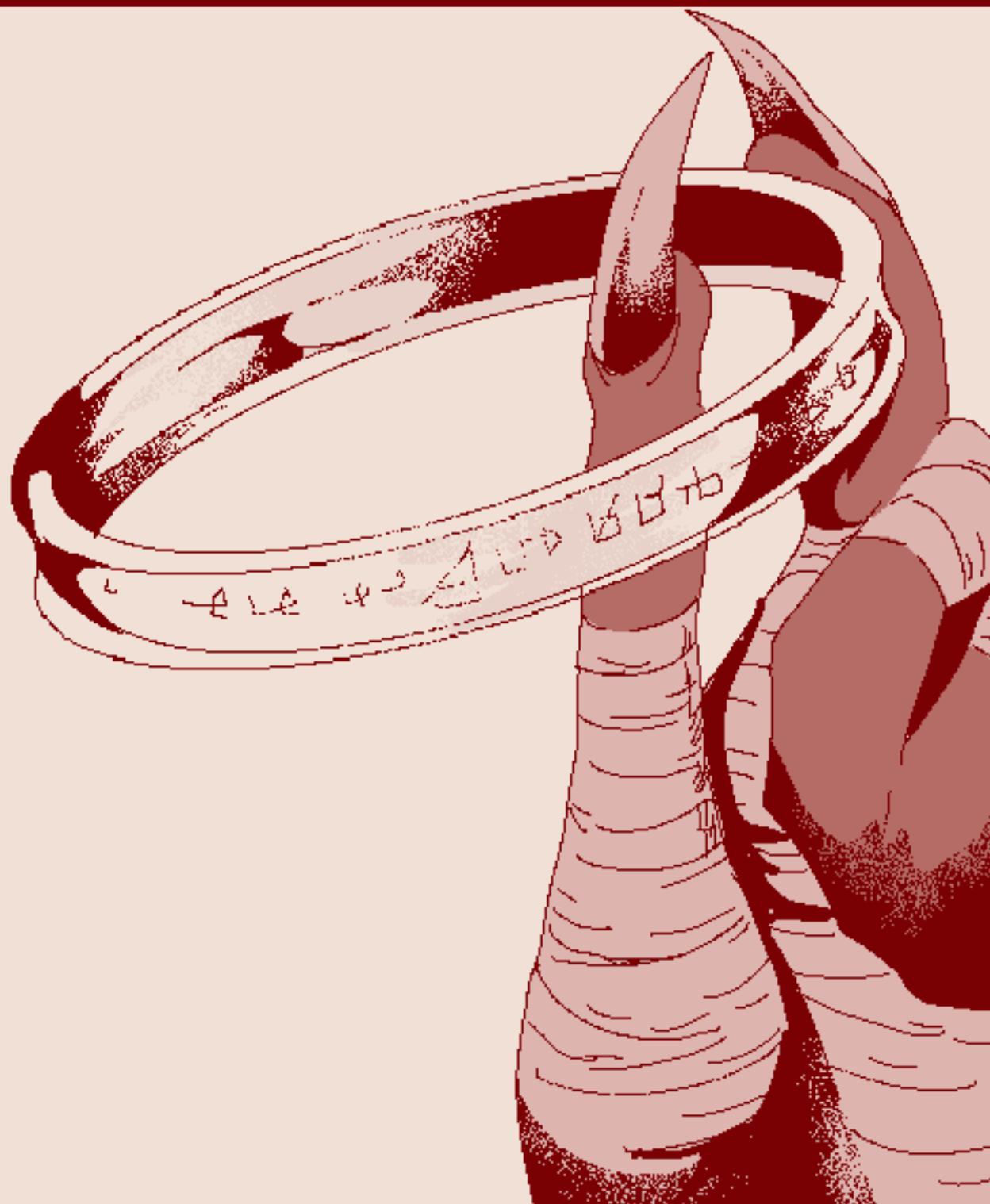
「なによ、悪魔は握手も知らないわけ？」

「ふっ…そうだな、今まで人間は誰も我々に手を差し伸ばさなかったからな。」

光が悪そうに、ニッと笑う。

結ばれた。





「んじゃあ、あんたらが持ってる情報全部寄こしなさい！」

更に、頬が伸ばし悪魔の様な顔で光は笑った。

周囲の悪魔たちの笑顔が微笑ましいものから引き攣ったものになった。

「デザイアリングは、この世界のホストであるデウスエクスマキナが、機械的に生物の潜在意識の多数の願いを叶える事を利用するためのものだ。

デザイアリングで欲望に忠実な者が増える程、世界が荒れてダークエリアの扉の締まりが緩くなる。

デーモン様は復讐、他の者は復讐もあるがダークエリアの過酷な環境で死ぬ仲間を助けたいという理由が大半だ。

ただ…このデザイアリング、並行同位体のデーモン様が使っていたのを回収したのだが、何故か解析できない不明瞭な部分が多かった。

入手タイミングも仕組まれたような自然すぎる不自然さと言うべきか。

そこで、鮎川に調査をさせていたのだがな…バックレたのだが、妙に義理堅いと言うべきか調査内容はいつのまにか置いていって行った。

解析の結果、出たのがこれだ。」

デビモンが白色のリングを出す。

「あっ！これ勇太と天使達の街で見たやつ！」

「コンセクレイションリング…反抗的なデジモンを従えるために作った洗礼用の…いや洗脳用のリング…破棄させた筈が。」

「思い出した！そもそもジジモンとババモンに言われたのも白色のリングの元を見つけろって！」

「てっきり…あのジジイがボケてたとばかり…。」

「このリングで僕の街のみんなを…。」

「私が見たゾンビのようなデジモン達も…そして、背後から襲ったのは。」

「デーモン様と勘違いしてたみたいだが、話を聞く限り天使だろうな、元々獣嫌いの連中だ。」

ケルビモン様自体も気に食わなかったのだろうな。」



「幾ら天使と言えどこんなものをばら撒けばデウスエクスマキナに対応される。
しかし、デザイアリングに偽装し、世界にばら撒き一気にその偽装を解けば。」
「世界を一気に、お手中にお納められる訳ですわね。」
「シオンはその成り立ち上、カーネルにも影響を及ぼせる。
そうすればシオンだけじゃない DW そのものが手に入る。」
「今頃出てきたって事は邪魔者のデーモンを私達で排除したからって事ね…あれそ
いえば雪奈達は？」
「どうやら人間とパートナーデジモンは MW に強制退去させられたようだ。
彼らはあくまで、他の DW からレイヤーを伝いシオンに来た。
シオンに直接招かれた光達と違い退去させるのは容易だろうな。」
「邪魔者も排除出来たって訳ね。」
「天使は人間にも興味を示していた…事実家畜のように天使達の街を秘密裏に作って
いたからな。
カーネルが制圧されれば…。」
「オグドモンを抑えようとしたのもその力以上にそのためだろうな。」
「で、親玉は誰よ？あんたの知り合いなんでしょう？」
「…恐らくは、セラフィモンとオファニモン。
特にセラフィモンは現体制の主柱。
獣の排除や人間も軽蔑していた…。」

ラッパの音が鳴り響く、音がする空を見上げると新たに天使達の大群が降り立つて来ていた。

「まっ、カチコミに行く前にまずは自分達の身の安全ね…。」

「先程、すみれがいたトレイルモンが動いているのが見えた。

誘拐された人間達もいる筈だまずは合流せねば…。」





「あんた達先に行きなさい。

ここは私とデュナスモンが足止めするわ。」

光とデュナスモンが前に出る。

「なに言ってますのお馬鹿！私達も！」

サンドリモンが光に喰って掛かる。

「あんた達もう限界でしょ？私達は余力がまだある。」

「…しかし！」

光が優しく微笑む。

「勇太ならきっとこうしたのよ…。」

だから…お願い。

もう誰もいなくなつて欲しくないの。」

「…。」

サンドリモンがヴォ—ボモンとアンティラモンを巻き込み光達を抱きしめる。

「…お必ず帰ってきなさい鬼塚 光。」

勇太様だからとかじゃない、あなたにはあなたのお強さがある。

あなた達が私に教えてくれたお事よ。

もっとそれをお見せてくださいまし。」

「僕も、もっと話したい事がある。

だから絶対帰って来て。」

「私も君達とまた食卓を囲みたい。」

一度…光の手料理も食べてみたいしな。」

「…うん。」

「私が必ず光を守り通す。」

だから信じて待っていてくれ。」

光達は名残惜しくも離れる。

天使達に向かう最中、一度だけ光は振り返って笑った。

その笑顔は、勇太に重なる笑顔であった。